

2005 年度

独自事業

北山村の女性たちと協働で「食」の新商品を研究開発

「食」とそれが生んだ「文化」は、今日地域づくりの重要なテーマになっている。英国の新聞王ノースクリフ卿の言葉を引用するまでもなく、どの時代の、どの民族にとっても「食」は最大の関心事である。いま、「ほんもの」「その土地にしかない」「物語」を発信する食が人を惹きつける。紀南地域は豊かで多様な「食」と「文化」を有するところである。埋もれたもの、可能性をもつものが、まだ多くある。

この事業は、北山村の女性たちとくに活性化センターが「協働」し、暮らしのなかにある地域の伝統的な知恵と技術を生かしつつ、食（料理を含む）の新たな可能性を耕し、商品化（特産、新料理）をめざすものである。日本で唯一の飛び地の村で多層な文化がある北山村には、じゃばらをはじめ山、川の産物など、可能性があり、あらたな「ブランド」の創造をめざす。

猿害対策研究会の設置

野生動物、とりわけ猿による果樹や農作物等への被害が依然目立つ。紀南地方の各町村では、被害が深刻である。水田などでの耕作放棄をする高齢者農家もある。水田のオーナー募集もできない地域もある。

猿と付き合いってきた忘れられた知恵も、紀南地方にはある。猿に関わる文化もふまえつつ被害の現状を把握し、猿害対策を打ち出す。研究会はきのくにと、地元関係者などで設置する方針。

休耕田の活用に関する研究会の設置

紀南地方では、過疎と高齢化にともない休耕田、放置された田畑がみられる。「田ごとの月」と形容される「山田」「棚田」は自然と人間がつくりあげた「文化的景観」であり、地域の「資産」である。それがいま、危機に瀕している。荒れた田は、世界遺産エリア、古道沿いにも広がっている。

研究会は、「棚田」に関係する住民、関心を持つ人たちに呼びかけて結成し、活用しながら保全していく「トラスト」やネットワークの立ち上げをめざし、その媒体役を活性化センターで担おうとするものである。

地域ネットワークの形成

きのくに活性化センターは、地域づくりに関わる人たちをつなぐことを設立目的の柱の一つに掲げ、その事務所はそうした人たちが集うサロン、交流の役割をになう場である。

そのため、今年度は「まちづくり団体」「産官学連携行動」ネットワークの形成、を軸に地域ネットワーク形成作業に取り組む。

企業ブランド構築に向けた住民意識調査

住民に愛される企業ブランド構築を目指し、ターゲット層のエネルギーに関する知識・意識を探り社会貢献のあり方を考えていくことなどを目的に行なっているもの。2004年度は市場調査を主に実施した。地元の白浜ガス株式会社からの委託事業で、企業からの初の受注事業となった。

委託事業

企業ブランド構築に向けた住民意識調査（継続）